語らない唇

多摩 玲紫

しんと静まり返った真夜中ーーーー遠くに聞こえる犬の咆哮と、僅かに喉の渇きを覚えて、ナオはふと重い目蓋を持ち上げた。
照明を落とした部屋はカーテンの隙間から月光が射し、ほんのりと明るい。
胸元や腰元は何かの温もりを感じるのに対し、肩や背中は肌寒さを覚え、ナオはぶるりと肩を震わせた。
すると、腰に巻きついていた温もりが力強く彼女の身体を引き寄せた。

語らない唇

ショウと身体を重ねた後、その温もりに抱かれてそのまま眠ってしまったようだ。下着を身につけた記憶はなかったが、きっと彼が着せてくれたのだろうと思う。
ショウはナオの腰に両の腕を回し、彼女の胸元に頭を埋めるようにして規則正しい寝息を立てている。
いつも掛けられた眼鏡は今だけはサイドボードに置かれ、彼の素顔が見られた。安らかに眠りを貪るその表情はまるで無垢な子供のようで、ナオは思わずクスリと顔を綻ばせた。
足元に落ちてしまっているタオルケットを引き寄せ、彼の剥き出しになった肩に掛け直してやる。
そして喉の渇きを癒すために水でも飲みに行こうかとそのまま身体を起こそうとすると、彼の寝惚けた二本の腕がまるで離れるなとでも言うようにナオをしっかりと抱き締め直した。

「むー…ナオー…」
「すぐ戻るよ」

普段のショウは「独占欲」とはかけ離れたところにいて、嫉妬心などまるでないようにスマートな男を振る舞っている。しかし、こうして眠りながらも片時も離 れたくないと主張する彼が、昼間の自分の姿はただの見栄だということを無意識のうちに物語っているのを見て、ナオは「ふふふ…」と幸せそうに微笑みながら、彼の指通りのいい柔らかな髪を掻き上げてその額に唇を寄せると、彼の腕とベッドからすり抜けた。

冷蔵庫からミネラルウォーターの500mlのボトルを取り出し、コクコクと喉を鳴らして嚥下すると、心地良い倦怠感を纏う身体にひんやりとした水がすぅっと浸透するような不思議な感覚を覚えた。
そのままボトルを手に寝室へ戻ると、いつの間にか意識を覚醒させたショウが、彼女が戻ってくるのを待っていたようにベッドヘッドに背をもたせて起き上がっていた。
まるで母親がいないと安らかに眠りにもつけないような子供のようだとナオは密かに思って苦笑する。しかし彼は決して「傍にいろ」などとは口にはしない。

「ごめん、起こしちゃった？」
「いや、いいよ。水…、俺にも」

目を細めて微笑み返すショウの傍まで行ってベッドに乗り上げ、ナオは「はい」とボトルを差し出すが、彼は一向に

それを受け取る気配を見せない。どうしたのだろうと彼の様子を窺うと、ショウはじっとナオの瞳を見つめ、「飲ませて」と唆すように甘い重低音で囁いた。
　ナオはふっと口元を緩め、「しょうがないなぁ」と責めるでもなく柔らかに笑んで返すと、膝立ちになって彼との距離を詰めた。すると先程と同じように腰と背中に回された腕が優しく彼女を抱き寄せ、それを見計らったナオはミネラルウォーターを軽く口に含み、キスを求めるように上を向いた彼の唇に自分のそれを重 ねた。
　彼の口腔にミネラルウォーターが流れ込むとごくりと喉を嚥下させる音が耳に届き、すべて注ぎ込んだ後も、貪欲な唇はまだ水を求めるかのように彼女の唇を甘噛みし、吸いついた。

「もっと…」

　唇の端から漏れた雫が首筋を伝うのにも構わず、ショウはもう一口強請った。
　普段非の打ち所のないようなスマートな男が意外にも甘え上手なことを、ナオだけが知っていた。
　ナオは再び口元を緩め、先程と同じように冷水を口に含むと、彼の欲張りな唇を塞いだ。

　- ＥＮＤ -

語らない唇

http://p.booklog.jp/book/55387

著者：多摩 玲紫
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/lib-rain/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/55387

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/55387

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ